

日常をつなぐ架け橋

研究室名 曾我部・吉岡研究室 氏名 佐塚将太

研究概要： 本計画は防災の役割を果たすことを前提とし、震災時に避難、復興、防災の拠点として機能する。同時に、人々の日常生活の支えとなり日頃の防災意識を高める。
津波により街の資源が流失することを想定し、土地の記憶を継承していく役割も担う。地域の人々が日常的に使いながら、時間と記憶を蓄積する器として次世代へ繋げていく。

研究目的：
東南海地震が想定される街に対する、震災発生前から被災後の復興までを視野に入れた事前復興計画

研究成果：



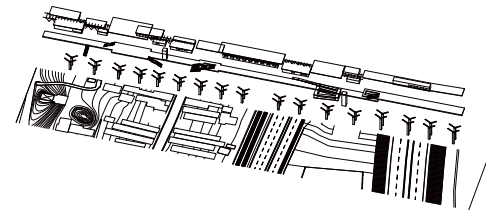
海岸に対して平行な横軸と、避難方向にある縦軸に建築を配置する。横軸は日常の裏の動線として緑道でつなぐ。



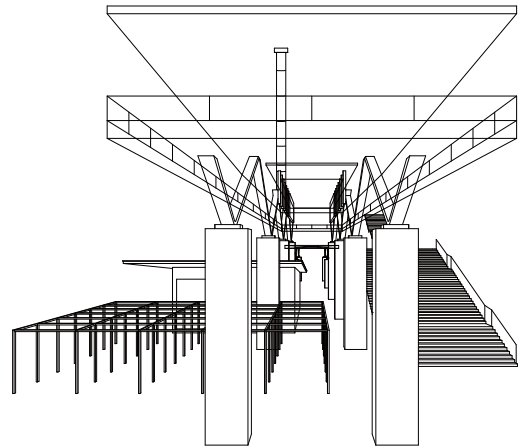
津波、土砂災害によりほぼ全ての建物は崩壊する。しかし、建築はそこに留まり街の骨格をそこに残す。



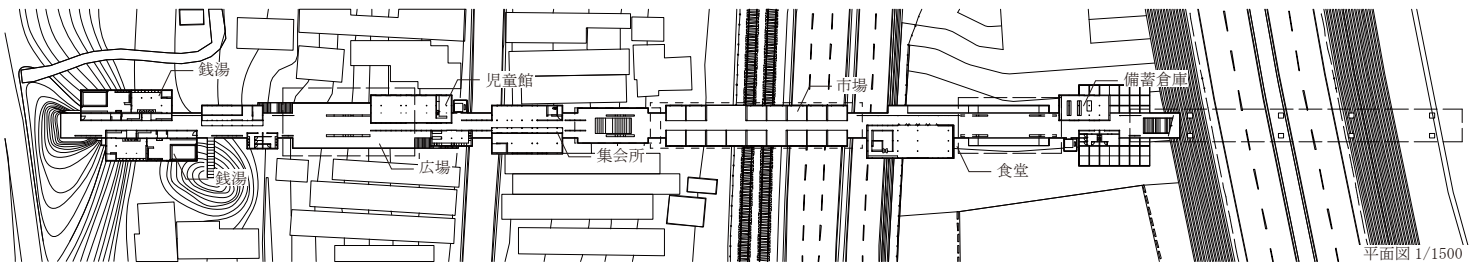
この建築を軸に復興していく。人々の日常や賑わいが面的に広がり復興が進んでいく。



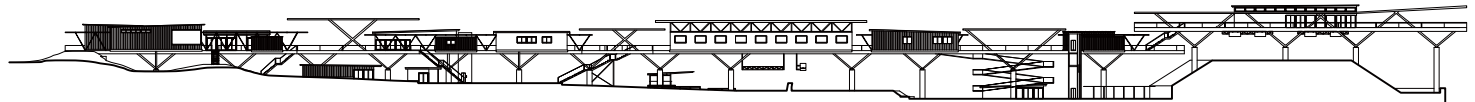
震災から免れることの出来る土木スケールで街をつなぎ、スケールの大きな建築の架構に、2本に分かれた細い鋼製の柱を混合させ、建築スケールへ近づける。そこに日常を補填する機能を持ったボリュームを付帯させ人々の居場所を作る。そしてこの建築への縦動線を様々な場所から確保し、大らかな動線と共に短時間で登る事の出来る動線を設置する。



イメージパース



平面図 1/1500



立面図 1/1500

苦労した点や感想など：

プログラムを整理していくまではスムーズに進められたが、その後の建築のアウトプットは難航し、スタディ模型を何パターンかつくるも、均一なものしか作れなかった。